

靈枢講義 九鍼十二原篇第一

－押韻文からの分析－

(2020年10月11日資料)

黄：渋江抽斎『靈枢講義』の押韻（京都大学貴重図書デジタルアーカイブで画像公開）

水：江有誥『音楽十書』「先秦韻読」で追加

(1) 韻文が含まれる段

【序段】

黄帝問於岐伯曰、余子萬民、養百姓、而收其租稅、余哀其不給、而屬有疾病、
余欲勿使被毒藥、無用砭石、
欲以微鍼、通其經脉、調其血氣、營其逆順出入之會、
令可傳於後世、必明爲之法令、
終而不滅、久而不絕、易用難忘、爲之經紀、
異其編章、別其表裏、爲之終始、令各有形、
先立鍼經、願聞其情、
岐伯荅曰、臣請推而次之、令有綱紀、始於一、終於九焉、請言其道、

【一段】

小鍼之要、易陳而難入、
粗守形、上守神、神乎神、客在門、未覩其疾、惡知其原、
刺之微、在速遲、粗守關、上守機、機之動、不離其空、空中之機、清靜而微、其來不可逢、其往不可追、
知機之道者、不可掛以髮、不知機道、叩之不發、
知其往來、要與之期、粗之闢乎、妙哉工獨有之、
往者爲逆、來者爲順、明知逆順、正行無問、
迎而奪之、惡得無虛、追而濟之、惡得無實、
迎之隨之、以意和之、鍼道畢矣、

【二段】

凡用鍼者、虛則實之、滿則泄之、宛陳則除之、邪勝則虛之、
大要曰、徐而疾則實、疾而徐則虛、

言實與虚、若有若無、察後與先、若存若亡、
 爲虚爲實、若得若失、虚實之要、九鍼最妙、
 補寫之時、以鍼爲之、
 寫曰迎之、迎之意、必持內之、放而出之、排陽得鍼、邪氣得泄、按而引鍼、是謂內温、血不得散、氣不得出也、
 補曰隨之、隨之意、若妄之、若行若按、如蚊虻止、如留如還、去如絃絕、令左屬右、其氣故止、外門已閉、中氣乃實、
 必無留血、急取誅之、持鍼之道、堅者爲實、正指直刺、無鍼左右、神在秋毫、屬意病者、審視血脉者、刺之無殆、
 方刺之時、必在懸陽、及與兩衛（衡）、神屬勿去、知病存亡、
 血脉者、在臉橫居、視之獨澄、切之獨堅、

【四段】

夫氣之在脉也、邪氣在上、濁氣在中、清氣在下、
 故鍼陷脉則邪氣出、鍼中脉則濁氣出、鍼大深則邪氣反沈、病益、
 故曰、皮肉筋脉、各有所處、病各有所舍、鍼各有所宜、各不同形、各以任其所宜、
 無實實無虚虚、損不足而益有餘、是謂甚病、病益甚、
 取五脉者死、取三脉者恆、奪陰者死、奪陽者狂、鍼害畢矣、

【五段】

刺之而氣不至、無問其數、刺之而氣至、乃去之、勿復鍼、
 鍼各有所宜、各不同形、各任其所爲、
 刺之要、氣至而有效、效之信、若風之吹雲、明乎若見蒼天、刺之道畢矣、

【七段】

觀其色、察其目、知其散復、一其形、聽其動靜、知其邪正、右主推之、左持而禦之、氣至而去之、
 凡將用鍼、必先診脉、視氣之劇易、乃可以治也、
 五藏之氣、已絕於內、而用鍼者、反實其外、是謂重竭、重竭必死、其死也靜、治之者、輒反其氣、取腋與膺、
 五藏之氣、已絕於外、而用鍼者、反實其內、是謂逆厥、逆厥則必死、其死也躁、治之者、反取四末、
 刺之害、中而不去、則精泄、不中而去、則致氣、精泄則病益甚而恆、致氣則生爲癰瘍、

【九段】

脹取三陽、飡泄取三陰、

今夫五藏之有疾也、譬猶刺也、猶汚也、猶結也、猶閉也、
 刺雖久、猶可拔也、汚雖久、猶可雪也、結雖久、猶可解也、閉雖久、猶可決也、或言久疾之不可
 取者、非其說也、
 夫善用鍼者、取其疾也、猶拔刺也、猶雪汚也、猶解結也、猶決閉也、疾雖久、猶可畢也、言不可
 治者、未得其術也、
 刺諸熱者、如以手探湯、刺寒清者、如人欲行、
 陰有陽疾者、取之下陵三里、正往無殆、氣下乃止、不下復始也、
 疾高而內者、取之陰之陵泉、疾高而外者、取之陽之陵泉也、

(2) 韻文が含まない段 (部分的に韻文を含む)

【三段】

九鍼之名、各不同形、
 一曰鑱鍼、長一寸六分、二曰員鍼、長一寸六分、三曰鍤鍼、長三寸半、四曰鋒鍼、長一寸六分、
 五曰鈹鍼、長四寸、廣二分半、
 六曰員利鍼、長一寸六分、七曰毫鍼、長三寸六分、八曰長鍼、長七寸、九曰大鍼、長四寸、
 鑱鍼者、頭大末銳、去寫陽氣、員鍼者、鍼如卵形、揩摩分間、不得傷肌肉、以寫分氣、鍤鍼者、
 鋒如黍粟之銳、主按脉、勿陷以致其氣、
 鋒鍼者、刃三隅、以發痼疾、鈹鍼者、末如劔鋒、以取大膿、員利鍼者、大如釐、且員且銳、中身
 微大、以取暴氣、
 毫鍼者、尖如蚊虻喙、靜以徐往、微以久留之、而養、以取痛痺、長鍼者、鋒利身薄、可以取遠痺、
 大鍼者、尖如挺、其鋒微員、以寫機關之水也、九鍼畢矣、

【六段】

黃帝曰、願聞五藏六府所出之處、岐伯曰、五藏五腧、五五二十五腧、六府六腧、六六三十六腧、
 經脉十二、絡脉十五、凡二十七氣、以上下、
 所出爲井、所溜爲榮、所注爲腧、所行爲經、所入爲合、二十七氣所行、皆在五腧也、
 節之交三百六十五會、知其要者、一言而終、不知其要、流散無窮、所言節者、神氣之所遊行出入
 也、非皮肉筋骨也、

【八段】

五藏有六府、六府有十二原、十二原出於四關、四關主治五藏、五藏有疾、當取之十二原、十二原
 者、五藏之所以稟三百六十五節氣味也、
 五藏有疾也、應出十二原、十二原各有所出、明知其原、觀其應、而知五藏之害矣、

陽中之少陰、肺也、其原出於大淵、大淵二、陽中之太陽、心也、其原出於大陵、大陵二、陰中之少陽、肝也、其原出於太衝、太衝二、

陰中之至陰、脾也、其原出於太白、太白二、陰中之太陰、腎也、其原出於太谿、太谿二、膏之原、出於鳩尾、鳩尾一、盲之原、出於腓腓、腓腓一、凡此十二原者、主治五藏六府之有疾者也、

【特徴】

①序段は押韻する文章であるが、解釈篇は無い。

②押韻する文章が含まれる段は、虚実補瀉を言い、解釈篇がある。『靈枢』小針解篇のほか、補瀉法については、『素問』宝命全形論・調経論、『靈枢』刺節真邪篇・官能篇などの解釈篇がある。

3押韻する文章が含まれない（少ない）段は、第三段は九鍼をのべ、『素問』鍼解篇・『靈枢』九鍼論の解釈篇がある。第六段・第八段は本輸をのべ、本輸篇が解釈篇と思われる。

（3）江有誥が指摘する押韻文がある論篇

◎：文章量が多い。具体的文章。

黄：虚実補瀉手法を述べる。

無：文章量が少ない。スローガンの文章。

①『素問』

上古天真論・◎四気調神大論・生氣通天論・◎陰陽応象大論・脈要精微論・三部九候論・◎宝命全形論・八正神明論・◎離合真邪論・刺要論・刺禁論・◎調経論・天元紀大論・気交変大論・五常政大論・六元正紀大論・至真要大論・示従容論・◎疏五過論・陰陽類論・方盛衰論

②『靈枢』

◎九鍼十二原篇・根結篇・官鍼篇・終始篇・経脈篇・營気篇・營衛生会篇・師伝篇・決気篇・◎脹論篇・病伝篇・外揣篇・五変篇・禁服篇・五色篇・論勇篇・◎官能篇・◎刺節真邪篇

（4）九鍼十二原篇を概観する

* 砭石・毒薬→九鍼（補法はあるが、写法が多い）→小鍼（補法が充実した）→心構え・注意事項も明確になった→スローガンも完成した。

（1）押韻しない

①原穴による五蔵の治療、九鍼による痛痺の治療が開発された。

第3段・第6段・第8段

(2) 押韻する

②小鍼による邪気実・真気虚の治療（補瀉）が開発された

第2段

③急性熱病に対する心構え、注意事項が明記された

第1段

④虚実治療の注意事項が明記された

第4段・第7段

⑤治療の要諦（スローガン）

第5段・第9段

(3) 押韻する序段をつけて完成した。